

れる。然るにこの設計は、利家の臣高山長房によつて變更せられ、尾坂口を正門、石川門口を搦手に定めた。文祿元年利家大坂に在り、金澤に留守した子利長に命じて石壘を築かせた。初め佐久間盛政の入城した時、本丸にある在來の金澤御坊を居館に充て、利家の就封した時亦之を假用した。既にして利家は自ら殿閣を築造したものと思はれるが、その事實は全く明瞭でない。慶長四年利家の薨後、利長封國に據つて叛亂せんとし、徳川家康が將に討伐軍を派せんとするとの流言が大坂に行はれたので、利長は城外を繞つて防禦線とする一の惣構を掘鑿させた。六年徳川秀忠の女、利常に入興した時、新たに居室を本丸に構へて、之を新宅と稱した。蓋し舊館と區別したのである。七年十月晦日雷火によつて天守閣を燒き、延いて本丸の殿閣を失うた。この天守閣は、利家の時に成つたものであるが、後再び之を起すことなく、三層櫓を舊の臺上に築いて代へた。十五年第三世利常、江戸幕府の命を奉じて名古屋城興造の助役に従ひ、金澤の留守篠原出羽一孝に命じて、先に述べた城外の惣構を繞り、別に一條の惣構を掘鑿させた。因つて前者を内惣構と稱し、後者を外惣構といふ。元和六年十二月廿四日長局の失火により再び殿閣を全燒し、翌七年正月造營に着手し、四月竣工して移徙の儀を擧げたが、この時城地の經畫又稍變更したといふ。寛永七年本丸の庭園に數寄屋を造つた。八年四月十四日城下法船寺門前に放火するものがあつて、城内辰巳矢倉・本丸も亦災に罹つた。是に於いて本丸の地、風威常に激しく居住に適しないことを思ひ、新殿閣の位置を

二、丸に移し、翌九年に至つて竣工した。同年郊外辰巳村より岸川の水を引くこと二里、之を諸郭の壘濠に灌へさせ、亦藩侯居室の庭前に導き、以て防火の用を助けることを期した。所謂辰巳用水といふものは是である。この後尚本丸中には屋形と稱するもの及び三層櫓を存したが、後者は上層二間四方、中層三間四方、下層五間四方であつたと言はれる。寛永新造の殿閣は、元祿九年六月十五日より改築せられ、十年六月六日落成して前田綱紀之に移つたが、六十餘年を経て前田重政の寶曆九年四月十日、泉野寺町舜昌寺の失火により、金澤城本丸二、丸・三、丸の諸建造物、石川・河北二門以下亦悉く災に罹り、その殘存したもの僅かに金谷御殿七十間長屋、新丸土藏、玉泉院丸西口矢倉門及び同所の土藏に過ぎず、本丸の三層櫓亦この時に燒けて、永く復興しなかつた。次いで前田齊廣の時文化五年正月十五日酉中刻、二、丸より火を發し、殿閣・橋爪門等を燒いたが、その翌年四月廿六日に落成した建築は、延いて明治に及ぶ最後のものではあつた。這次復興せられた二、丸御殿の建坪は、之を圖によつて計算すると、その附屬建物と共に、約千九百九十坪を有した。明治二年七月前田慶寧版籍を朝廷に奉還し、十一月老臣本多氏の廣坂邸に移つた。而して舊城は廢藩置縣の後、四年八月兵部省の所管に歸し、五年二月陸軍省所轄となり、六年兵營を設けられた。之より二、丸の殿閣は兵舎の用に充てられ、九年四月本丸以下の太鼓塀・柵門を撤したのみならず、十四年一月十日の朝失火により二、丸御殿を燒いたから、現に舊觀の存するもの僅かに石川門及びその

辨形を圍む櫓樓と三十間長屋のみである。
カナザハジヨウダイ 金澤城代 金澤御城代は、天正十一年前田利家が石川・河北二郡を羽柴秀吉より加恩せられて金澤に入城以來、留守毎に舎見藏人利久を城代としたを初とし、天正十八年には前田五郎兵衛安勝之を勤め、其の後小塚八右衛門秀正が勤め、大坂兩役には奥村永福入道快心が勤めた。其の後正保年間までは不明、慶安四年に奥村河内榮政、その後明暦年間まで不明である。次いで萬治年間に前田丹後直時・小幡宮内長次が命ぜられ、此の時本丸と二、丸との主附が分かれたが、寛文四年兩御丸主附を止め、同年から九年まで奥村伊豫榮清が之に任じた。又十一年前田佐渡孝貞、延寶元年奥村臺岐唐禮が命ぜられ、これよりこの二人が兩年充勤務し、天和元年より貞享四年迄は奥村伊豫時成を加へて三人替々々勤めた。次いで元祿元年よりは御用番から取捌いたが、五年再び前田駿河守孝貞之に任せられ、十年六月より又御用番が勤めた。十四年村井出雲親長、正徳元年から御用番取捌となり、同一年前田美作守孝行、享保六年奥村伊豫守有輝が命ぜられ、前田孝貞以後こゝに至るまで一人役であつた。十五年横山大和守貴林・本多安房守政昌二人相並び、延享五年奥村助右衛門修古が命ぜられて又一人役となり、寶曆七年正月村井豐後守長堅の卒後、同年十二月十六日本多安房守政行・前田駿河守孝昌の兩名に御城方御用向を當分勤むべく命ぜられるに及び、爾後兩人の定員となり、職名も金澤御城方御用主附といひ、當分役になつた。

内に在つて、もと前田齊廣の菟裘たる竹澤御殿の鎮守で管公の畫像を奉祀してある。金澤古蹟志に文政二年三月創始とするのは誤で、同年は竹澤御殿創始前だから、鎮守の置かれやうはない。この御殿は文政六年に起つて、初はもとこの地に在つた學校附屬の天満宮を鎮守に代用して居たのであるが、七年の初それを新學校の園内に移し、竹澤御殿の鎮守として別の天満宮を起したことは、奥村伊豫榮實の書いた官私隨筆文政七年二月十一日の條に明らかである。同年齊廣卒して後御殿を毀つたが、竹澤天神のみは尙存し、明治五年に竹澤天神社、七年六月にまた金澤神社と改稱した。
カナザハジンシヤライレキ 金澤神社來歴一册。明治十二年森田平次著、兼六園内にある金澤神社の來歴、その境内なる金洗澤の傳説等を記すものである。
カナザハチズ 金澤地圖 藩老横山氏の所藏に萬治から寛文五六年頃までの金澤分間大繪圖があつた。大き三間四方。又森田平次藏の圖は、横幅六尺二寸、縦五尺四寸、藩士居邸の間數と姓名とが記されてゐて、亦寛文中のものである。又侯爵前田家に延寶七年八月九日と記した地圖があるが、蝕蝕甚だしい。有澤武貞は前記横山氏藏地圖を三分十間に縮小して、元祿九年から享保十九年に至るまで三十九年間を費して補正し、その上部空間に加州金澤正極之大圖序として、金澤の略歴・城下得失考・加州金澤町割之圖成之辨を記入した。その後天保元年十二月に金澤分間繪圖が完成したが、それは遠藤高環の監督の下に、西村太神・河野久太郎・早川理兵衛・三角風藏が九々